

交流及び共同学習の実践における教師の工夫

— T市小学校教師へのアンケート調査から —

宮脇 恭子¹⁾・阿部美穂子²⁾

交流及び共同学習では、充実した学習活動を実現できるように、さまざまな配慮や工夫をする必要がある。本研究では、交流及び共同学習を推進するための手がかりを得ることを目的に、T市内の8つの小学校の特別支援学級担任8名及び現在または過去に交流学級担任の経験がある教師70名に、交流及び共同学習において行っている配慮の現状や連携の方法の実際を、直接的な配慮、環境での配慮、集団参加への配慮の3つの視点から、アンケートを用いて調査した。調査結果から、教師が実際に行っている能率の良い連絡・調整の工夫や、特別支援学級の児童の学習への取り組みを促すための配慮、コミュニケーションを促すための配慮、参加を高めるための交流学級での座席配置や活動グループの配慮、交流時間帯の配慮、保護者や児童に対する障害理解・啓発への取り組みなどの実態が明らかになった。

Key words ; 交流及び共同学習 障害児 連携 障害理解

I. 目的

平成16年6月に障害者基本法が一部改正され、国及び地方公共団体は、障害のある児童及び生徒と障害のない児童及び生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならないという規定が設けられた。従来の交流学習に共同学習が加わったことで、これまで相互のふれあいを通じて豊かな人間性を育むことを目的とする交流の側面を一層発展させ、障害のある幼児児童生徒だけではなく、障害のない幼児児童生徒にとっても有効な活動となるように、一層の効果的な実施に向けた取組を推進すべきことが明らかになった(文部科学省、2007)。また、小学校学習指導要領解説総則編(文部科学省、2009)においても、「障害のある幼児児童生徒との交流は、児童が障害のある幼児児童生徒とその教育に対する正しい理解と認識を深めるための絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていることの大切さを学ぶ場でもある」と、交流及び共同学習の重要性が示

されている。

このように、交流及び共同学習は、今日の学校教育における重要な活動の一つといえる。交流及び共同学習の実践によって成果を得るためには、まず、関係する教師がその重要性やねらいを共通理解することはもちろんであるが、実際には、障害のある子どもとそうでない子どもが活動を共有し、ともに充実した学習活動を実現できるように、さまざまな配慮や工夫をする必要がある。

山本・佐藤(2008)は、Y市内の小学校教師に質問紙調査を実施し、特別支援学級担任(117人回答)、交流級担任(162人回答)に対し、交流及び共同学習を行う上での配慮事項等を尋ねた。その結果、実際に行ったことのあるものとして、「付き添いをつける」「個別の支援を行う」など、特別支援学級の児童が学習や活動に参加しやすくするための配慮や、「係活動をする」など、特別支援学級の児童も交流級の一員と捉えて社会性を培うための配慮が行われていた。一方で、特別支援学級担任は、交流及び共同学習の際、特別な配慮は行わないことが30%以上あり、交流級担任も30%近く何らかの理由で特別な配慮を行っていないケースがあった。

1) 富山市立奥田小学校

2) 富山大学人間発達科学部

また、交流級担任の約20%が「連絡を取り合いたいが時間の確保が難しい」と答えており、多忙により担任同士の連絡が十分に取れない現状がうかがわれる。そのため、交流級担任は、障害の特性が理解できない、かかわり方が分からない等と感じており、通常級での学習について、特別支学級担任がもっと積極的にかかわることを希望している。

以上のように、交流及び共同学習の実践において、教師はそれぞれが何らかの配慮をしていることが分かった。また、一方で全く配慮が行われていない実態があることや、交流にかかわる教師間の連携の困難さが課題となっていることも分かった。

効果的な交流及び共同学習を行うためには、各教師が実施している配慮や工夫をお互いに共有し、拡げていく必要がある。しかし、山本らの研究では、配慮の具体的な内容までは明らかにされていない。実際の交流場面で生かすためには、各教師が行っている配慮の具体的な内容についてさらに調査する必要がある。また、併せて、連携の方法についても、実際にどのような工夫が行われているかを調べる必要がある。

そこで本研究では、交流及び共同学習において、特別支援学級担任や交流級担任が行っている配慮の現状や連携の方法の実際をアンケートを用いて調査する。調査に基づき、配慮の実際を多様な側面から明らかにし、今後、交流及び共同学習を一層推進するための手がかりを得ることを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

T市内の8つの小学校の特別支援学級担任あるいは交流学級担任をしている、または過去にした経験のある教師

2. 調査方法

交流及び共同学習を行うにあたってどのような配慮をしているか（あるいは、過去に行ったか）について記入するアンケート調査を実施した。

アンケートは無記名回答とし、特別支援教育に関する講演会（平成21年6月）に参加した教師に配布し、同日回収した。講演会には、T市内8小学校の教師約160名が参加した。調査対象とした8つの

小学校のうち、特別支援学級が設置されているのは7校で、その学級数は9である。アンケートについては、特別支援学級担任、本年度または過去に交流学級担任の経験がある教師にのみ回答を求め、それ以外の教師には回答を求めなかった。

3. 調査内容

配布したアンケート用紙を図1に示す。

調査の大項目として、①直接的な配慮、②環境での配慮、③集団参加への配慮の3つを設定し、さらに、それを複数の下位項目に分けた。

①直接的な配慮とは、特別支援学級の児童に直接的に働きかけ、活動の参加を促すために行われる配慮を指す。下位項目として、担任同士の連絡・調整に関する配慮、学習への取り組みを促すための配慮、特別支援学級の児童本人とのコミュニケーションを図るための配慮、付き添いや、学習の補助に関する配慮の4点が含まれる。②環境での配慮とは、教室や学習の環境等、特別支援学級の児童の参加を促すために間接的に行われる配慮を指す。下位項目として、交流級での座席に関する配慮、交流級でのグループ構成に関する配慮、交流の時間帯に関する配慮の3点が含まれる。③集団参加への配慮とは、周囲の人々等に働きかけることによって特別支援学級の児童の集団参加を促進するための配慮を指す。下位項目として、保護者への啓発に関すること、他の児童の障害理解に関すること、特別支援学級の児童本人への係や当番の割り当てに関すること、送迎など教室の移動に関することの4点が含まれる。

各下位項目ごとに、教師が「より充実した交流及び共同学習となるように実際に行ったことのある配慮」について、具体的な例を自由に記述するように求めた。また、大項目に含まれないと判断される配慮事項については、その他として欄外に記入するように求めた。

Ⅲ. 結果及び考察

結果処理にあたって、第1筆者が記述事項に含まれるキーワードを選び出して整理し、その結果を第2筆者ともう1名の特別支援教育に携わった経験のある教師で検討した。得られたデータは単純集計により分析した。

1. 回収数

特別支援学級担任 8 名、交流学級担任 70 名より回答があった。特別支援学級担任については 88.9% の回答率である。

2. 直接的な配慮について

(1) 担任同士の連絡・調整に関する配慮 (表 1)

多忙な中でも、定期的に連絡を取り合う時間を決め、週案や連絡ファイル、メモなどを活用し、内容を絞り込むなど、方法や時間、内容を意図的に設定することで、連絡・調整ができるように工夫している人が 21 人で全体の約 30% 見られた。各教師が、短時間で能率の良い連絡・調整ができるように工夫していることが分かった。

表 1 担任同士の連絡・調整に関する配慮
(数字は人数、以下同様)

連絡・調整する方法
・ファイル（ノート）を作って連絡を取り合う。7
・週案をたて、渡すときに話をする。3
・メモを渡す。2
・特別支援学級の授業を参観し児童の理解を深めている。2
・交流級担任と特別支援学級担任の職員室の席を隣にして連絡を取りやすくする。1
連絡・調整をする機会の設け方
・気づいたときに連絡を取り合う。6
・毎朝、一日の予定を確認している。4
・放課後に、次の日の連絡をする時間を設ける。2
連絡・調整する内容
・交流級での子どもの様子を伝えるようにする。4
・日程確認する。3
・ねらいを簡単に打ち合わせる。3
・有効なかかわり方を特別支援学級担任に聞く。2

(2) 学習への取り組みを促すための配慮 (表 2)

交流級の学習に参加しやすいように、特別支援学級で事前学習をするという回答が 9 名 (12%) と多かった。特別支援学級の児童が事前学習をすることで、見通しをもって参加できるようにするための支

援だと思われる。また、視覚的な支援や声かけなど、交流場面における個別的な働きかけを取り入れていることが分かった。

一方、「実態にあったプリントを準備する」「ひらがな・カタカナカードを見ながら文字を書く」など、授業時間の中で特別支援学級の児童が取り組むことができる特別な教材準備などの配慮は少なめであった。

表 2 学習への取り組みを促すための配慮

・交流級の学習に参加しやすいように、特別支援学級で事前練習する。9
・視覚的支援を準備する。5
・個別に声かけをする。5
・実態にあったプリントを準備する。1
・ひらがな・カタカナカードを見ながら文字を書くようにする。1
・がんばりカードを準備する。1
・準備物を忘れず伝える。1
・体験活動を多く設定する。1
・授業のゲームのルールを交流する子どもの障害の状態に応じたものになるように、子どもたちが考えた。1

(3) 特別支援学級の児童本人とのコミュニケーションを図るための配慮 (表 3)

教師側から積極的に声をかけ、コミュニケーションを図っているという回答が 13 名 (16%) で多かった。また、「カードを用いる」や「書いたり選択させたりする」といった、特別支援学級の児童にとってコミュニケーションを図りやすい方法を使うことに関する回答は少なかった。このことから、担任同士が、その子どもにとって使いやすいコミュニケーションの方法を具体的に共通理解し、交流場面でも積極的に取り入れる必要があると考えられる。

表 3 特別支援学級の児童本人とのコミュニケーションを図るための配慮

・積極的に声をかける。10
・挨拶をする。3
・特別支援学級に直接行くようにし、がんばったことを認め励ます。3

- ・一緒に遊ぶ。2
- ・カードなどを用いてコミュニケーションができるように準備し、行動につなげる。1
- ・書いたり選択させたりする。1
- ・学習や活動の節目に「できた?」「どう?」という確認をする。1
- ・積極的にスキンシップを図る。1
- ・注意がそれないように、静かなところで話す。1

(4) 付き添いや学習の補助に関する配慮(表4)

日常的に行われる交流及び共同学習では、毎回付き添いがついている場合は3名と少なく、交流級の担任に任せられている場合が多い。これについて、付き添いが少ないのは、単に必要なからという理由だけではなく、人的、時間的に補助する教師を確保できないという問題が影響している可能性も考えられる。

一方、少数ではあるが、特別支援学級の児童とのかかわりが広がるように、具体的にかかわり方を示したり、声をかけたりする工夫や、特別支援学級担任が常に補助するのではなく、特殊学級担任のリードで授業を進め、交流級担任が補助をするなどの配慮がなされていることが分かった。

表4 付き添いや学習の補助に関する配慮

- ・必ず付き添いがついている。3
- ・宿泊学習や教室外の活動の時は、特別支援学級の子ども対応の教師を1人設ける。2
- ・特別支援学級の子どもへのかかわり方が分かるように、具体的に示す。2
- ・特別支援学級担任と交換授業を行い、交流級担任が支援が必要な子どもにつく。1
- ・特別支援学級の子どもとのかかわりが生まれるように、周りの子どもに声をかける。1
- ・付き添いはいない。1

3. 環境での配慮について

(1) 交流級での座席に関する配慮(表5)

交流級と特別支援学級を行き来することが多いので、「出入りしやすい座席」という回答が16名(20%)と多い。座席に関する配慮の回答の数が多いことか

ら、積極的に行われていることが分かった。

表5 交流級での座席に関する配慮

- ・出入りしやすい座席にする。16
- ・教師が支援しやすい座席にする。12
- ・お世話してくれる子どものものそばにする。5
- ・いろいろな場所になるように配慮する。3
- ・モデルとなる子どもの見える席にする。2
- ・座席を固定する。2
- ・全体が見渡せる場所(一番後ろ)にする。1
- ・空席になっても目立たない位置にする。1
- ・外に気が散らない場所にする。1
- ・変更が苦手な子どもだったので席替えは学期に1回にする。1

(2) 交流級でのグループ構成に関する配慮(表6)

特別支援学級の児童が活動する際には、世話をしたり、声をかけたりして手助けをしてくれる子どもと一緒にグループになっていることが47名(62%)と多い。このことから、友達の手助けを受けて活動している現状が伺われる。通常級の児童たちが障害理解を深め、適切なかかわり方を知ることが、交流及び共同学習の充実に大きくかかわってくると思われる。

表6 交流級でのグループ構成に関する配慮

- ・特別支援学級の子どもに、積極的にかかわることのできる子どもと一緒に 18
- ・世話をしてくれる子どもと一緒に 15
- ・特別支援学級の子どもが心を許せる子どもと一緒に 12
- ・優しい子どもと一緒に 12
- ・特別支援学級の子どもを理解してくれる子どもと一緒に 3
- ・多くの友達と仲良くなれるように配慮する。2
- ・自己中心的な子どもはさける。1
- ・特別支援学級の子どもが苦手な子どもとは一緒にしないようにした。1
- ・特別支援学級の児童も含めて、交流級への所属意識を高めるようにしている。1
- ・特別支援学級の児童に選択させる。1

(3) 交流の時間帯に関する配慮 (表7)

特別支援学級の児童の生活のリズムを考慮し、1時間目は特別支援学級で過ごせるようにする配慮を行っているのは6名(7%)であった。特別支援学級の児童の実態に合うように交流及び共同学習を取り入れて、特別支援学級の時間割を作成するためには、学校全体の共通理解と協力による体制作りが不可欠と思われる。

表7 交流の時間帯に関する配慮

- ・2時間目以降にしてもらう。5
- ・同じ教科の時間に交流している。3
- ・2限目に交流学習を設け、大休憩にはそのまま遊べるようにする。1
- ・生活のリズムを安定させるために、1・6限はさける。1
- ・交流の時限を固定して変更しないようにする。1
- ・子どもに負担がかからないように、時間が多くなりすぎないようにする。1

4. 集団参加への配慮について

(1) 保護者への啓発に関すること (表8)

特別支援学級児童の保護者と交流級児童の保護者、それぞれに対する配慮があった。中でも、「交流学習によって交流級の子どもたちにどのような成長があるかを話した。」という積極的な啓発がみられた。交流学習の内容を話すだけでなく、子どもたちにどのような成長があるかについて話すことは、交流級の保護者の理解を得るために重要なことである。それとともに、特別支援学級の保護者にとっても、交流及び共同学習の意義を広い視野で理解してもらうために必要なことであると考えられる。

表8 保護者への啓発に関すること

- 特別支援級児童の保護者に対して
- ・送迎の際に、学校(交流及び共同学習での)の様子を話す。8
 - ・保護者のニーズ(交流及び共同学習について)をよく聞く。3
 - ・保護者同士の関係作りのために、学校行事や草むしりなどの参加を呼びかける。1

交流級児童の保護者に対して

- ・一緒に活動している写真を掲示したり、話題にしたりしながら、交流及び共同学習によって交流級の子どもたちにどのような成長があるかを話す。2
- ・子どものことについて母親から他の保護者へ理解を求めるように話してもらう。
- ・どの子もクラスの一員であることを話す。1

(2) 他の児童の障害理解に関すること (表9)

交流級の担任が児童の障害特性についてよく知ることが他の児童の障害理解につながるという視点に立った回答が15名(20%)で最も多かった。交流級担任が、障害について理解したいと感じていることがうかがわれる。

「苦手なこと」に対して援助し、「できること」は本人の力でやるようにという考えを交流級担任から話すことや、トラブルが起きた時に教室全体で話し合う機会を設けるなど、積極的に子どもの障害理解を図ろうとする対応と、少数ではあるが『何で〇〇級にいるの』という質問には答えないようにする。」という回答のように、子ども自身が自然に理解するのを待つという、消極的な対応があった。

表9 他の児童の障害理解に関すること

- 交流級の担任がしたこと
- ・教師が研修会に参加して理解を深めたことを子どもに伝える。15
 - ・特別支援学級の子どものできること、できないことを話す。できることを大切にするように話す。6
 - ・発達段階に応じて相手の合意を得た上で、障害について説明し、どのように接してほしいかを話し、体験指導をする。2
 - ・道徳や学級活動を利用して、障害についての理解を図る。1
 - ・特別支援学級の児童は特別な存在ではなく、生活の中で少し苦手な部分があるから、そこを助けて合って気持ちよく生活できるようにしようということを子どもたちに話す 1
 - ・何か問題が起きたときはすぐにクラスで話し合

う。1

- ・日々の生活の中で理解を深める。1
- ・偏見がある言葉や行動が見られるときは、相手の気持ちを考えることを指導し、本人の居場所があるように配慮する。1
- ・誰でも一人一人が大切な存在であることを伝えている。1
- ・いじめられそうになったら、「〇〇ちゃんは優しいからやめよう」と指導する。1
- ・分かることを増やすために、特別支援学級に行っていることを説明する。1
- ・できることなのにやらないときは、皆と同じようにしかり、特別扱いしないようにする。1
- ・「何で〇〇級にいるの」という質問には答えないようにする。1

特別支援学級の担任がしたこと

- ・交流級の子どもたちに、特別支援学級の教室掃除に来てもらって、掃除の後ゲームをして交流を図る。1
- ・特別支援学級の子どもの様子から、その子どもの思っている事を代わりに伝える。1
- ・状況に応じて行っている。1
- ・特別支援に関する職員全体会を開催し、全職員で見守るようにする。1

難しかったこと

- ・子どもたちがやめて欲しいと感じていることそのものが障害特性の場合、交流級の子どもたちへの支援が難しい。1
- ・健常児の理解はなかなか得られないこともある。1

(3) 特別支援学級の児童本人への係や当番の割り当てに関すること (表10)

子どもができることを役割としているという回答が多く、特別支援学級の児童の特性を生かし、様々な係活動を行っていることが分かった。また、「内容、終わりが分かりやすい活動を割り当てる」というように、活動を割り当てる際には、仕事の手順などを分析し、本人にとって見通しが付き、やり方が分かりやすいようにする配慮が大切であることが分かる。「友達と一緒にの係」という回答もあり、ここからも

交流級での活動が、友達の協力を得て行われていることがうかがわれる。

表10 特別支援学級の児童本人への係や当番の割り当てに関すること

- ・できることを役割とした。21
- 例
 - ・給食当番・片づけ
 - ・配布物をもって来る係
 - ・おつかい係
 - ・なぞなぞを考える係
 - ・伝達係
 - ・交流担と特支担の連絡メモを渡す係
 - ・友達の名前を覚えられるように歯磨きチェックの仕事
 - ・集会係
- ・友達と一緒にの係になるようにする。4
- ・好きなことをいかしたり、割り当てたりする。3
- ・分かりやすい仕事に割り当てる。(内容・終わりが分かりやすい活動) 1

(4) 送迎など教室の移動に関すること (表11)

特別支援学級の児童が一人で目的の教室まで移動できない場合には、交流級の児童が迎えに行っているケースが多いようである。送迎も、子ども同士の交流の機会ととらえて、積極的にいろいろな子どもとのかかわりを作るために工夫している取り組みもあった。

また、少数ではあるが、単に移動だけを目的とせず、日常的な行き来ができるように、教室環境の工夫がなされていることが分かった。

表11 送迎など教室の移動に関すること

- ・迎えに行っている。
- <いつ> 遅いときだけ 4
- <誰が> 仲のよい子ども 4
- 気づいた子ども 4
- 係の子ども 2
- 同じグループの子ども 6
- 日直 1
- ・サポーターと移動している。2
- ・子ども同士がどちらの教室でも入って遊びやすいような教室環境にした。2

- ・自分一人で行けるようになることを目標に支援している。1
- ・送迎も子ども同士の関係作りと考え、慣れた子どもから、いろいろな子どもへと広げていった。1
- ・教室を隣にして行き来しやすいようにした。1

IV. まとめ

アンケート結果から、交流及び共同学習において、特別支援学級担任や交流級担任が行っている配慮の現状や連携の方法の実際を知ることができた。これらの配慮や連携の工夫について、当事者である特別支援級担任と交流級担任だけでなく、学校の教師誰もが知っておくことや、必要に応じて学校全体で行う配慮事項として位置づけておくことで、多様な学校教育場で、交流及び共同学習を促進することにつながると思われる。

最後に、アンケート結果から得られた情報を基に、交流及び共同学習を効果的に進めるために、特に重要と思われる配慮事項と今後の課題について述べる。

(1) 共通理解のための能率の良い方法の工夫

教師の共通理解の機会とは、例えば、年度始めや学期の節目、年度末等にまとまった時間を設けることが必要である。そこでは、特別支援学級の児童、交流級の児童、それぞれの視点からの交流及び共同学習のねらいやそのねらいを達成するためにふさわしい授業形態（交流の期間、教科、参加形態）、さらには実践計画や実践後の評価などについて十分に協議し合うこととなる。しかし、実践にあたっては、それにもまして日々の子どもの姿や授業の目的や内容、それらに応じた手立てなど、関係する教師間で、教師同士が連絡を密にとることが不可欠である。しかし、共通理解したい意思があっても、多忙な毎日の中でその機会をどのように確保するかが大きな課題である。

このことについて、アンケート結果から、ファイルの交換、週案、メモの受け渡しなど、連絡しやすいツールを工夫するとともに、打ち合わせしやすい職員室内の座席の配置の配慮や定期的で日常的な短い打ち合わせ時間の位置づけなど、負担が少なく効率の良い共通理解の方法と機会に関する環境設定の

方法、及び短時間で共通理解すべき事項のポイントを明らかにすることができた。特に、職員室の座席配置や教師同士の授業参観などは、関係担任だけでなく、学校の全職員がその必要性を理解して協力し合う体制が求められる。

(2) 授業をつなぐ事前学習の工夫

アンケートでは、学習への取り組みを促すために特別支援学級で事前学習する配慮が多く挙げられた。事前学習は、特別支援学級の児童にとって内容の理解を促進することや、学習への見通しをもったり、予め参加に必要なスキルを身に付けたりすることに役立つだけでなく、交流級での成功体験を導き、さらに他の児童から認められることで、有能感や自信の向上にもつながるものである。

このことから、特別支援学級における授業と交流級における授業をそれぞれ独立して考えるのではなく、内容に関連性をもたせたり、流れを意識したりして組み立てる必要があることが分かる。特に、特別支援学級の担任は、交流級担任と連絡を取り合いながら、交流級における授業において特別支援学級の児童が達成すべきねらいや取り組むべき活動内容を実態に合わせて分析し、それを特別支援学級の授業に整合性をもって組み入れる柔軟な対応が求められることとなる。

(3) 周囲からの適切な援助を引き出すための特別支援学級担任の役割

アンケート結果から、特別支援学級の児童は、友達の協力を多く得ながら学習や係活動などに取り組んでいることが分かった。この協力をうまく機能させるためには、交流級の児童が特別支援学級の児童の障害の実態を理解し、適切なかわり方を身に付けるための手立てが必要である。このことについて、アンケート結果からは、担任が「伝える」「話す」「説明する」などの方法で概念的な理解を促すことが中心であり、直接的なかわりスキルに関する体験的な学びの機会は少ないことがうかがわれた。

このことから、特別支援学級担任が率先して、付き添いの際や、行事、集会などの機会を生かして、学習の補助だけでなく、特別支援学級の児童へのかわり方が周囲に分かるように意図的に指示した

り、モデルを示したりすることで、その児童へのかかわり方を知ってもらい、誰もが適切なかかわりできるように拡大していく必要があると考えられる。さらに、情報提供の方法としては、特別支援学級の児童とかかわるときのこつを具体的に表した、サポートブックを作成することなども有効であると考えられる。

以上については、交流級の児童のためだけでなく、交流級担任にとっても自ら適切な援助を実践するために必要な手がかりとなる。先に挙げたように、山本らの研究からも交流級担任は、障害の特性や具体的な支援の方法をつかみかねていることが示されている。従って、特別支援学級担任が、交流及び共同学習の授業に付き添った際は、単にT2として学習の補助を行うだけでなく、特別支援学級の児童に対する支援の実際を、交流級の担任に伝えることを意識して指導にあたる必要がある。

また、特別支援学級担任からの情報提供においては、特別支援学級の児童ができないときにどのように手伝うだけでなく、どうやったらその子どもが一人でできるかという視点から、その子どもが使いやすい教材教具・環境整備の在り方などについて、積極的に示していく必要があろう。特に、アンケート結果から、コミュニケーションの方法について、言葉かけだけでなく、特別支援学級の児童に分かりやすい方法を開発し、提案していく必要があることがうかがわれた。このような取り組みにより、特別支援学級の児童について、「助けてあげなければならない子ども」から、「適切な手立てを用意してあげれば、自分でできる子ども」へと理解を促進することができるのではないと思われる。

以上のような取り組みは、通常の学級に在籍している支援を必要としている子どもへの対応にも通じるものであり、特別支援学級の担任の役割が期待されるところである。

(4) 障害理解を進めるための新たな実践

アンケートでは、交流級の担任が特別支援学級の児童の障害特性についてよく知り、それを交流級の

児童に伝えることで、障害理解につながるという回答が多くあり、障害特性を知することは、交流及び共同学習のねらいを達成するためにも必要な要件であると考えられる。しかし、その特性をどのように伝え、児童らの障害理解とかかわりをどのように育てていくかについては、各担任が手探りの段階にあるといえる。

徳田・水野（2005）によれば、周囲の子どもの障害の理解段階は、障害のある人がいることに気がつく「気づきの段階」、障害のある人と接する時に必要な配慮は何かについて知る「知識化の段階」、障害のある人と接することで、その人の感情や意志を知る「情緒的理解の段階」、正確な知識をもち、障害のある人に対する適切な態度が形成される「態度形成段階」、生活場面で適切な援助をする「受容的行動の段階」の5つがあるとされている。そこで、直接的な交流及び共同学習を積み重ねることに併せて、特別支援学級担任と交流学級の担任が協力して、交流学級の児童が今どの段階の理解にあるかについて実態を把握し、障害理解教育を目的とした授業プログラムを開発し、実践していくことも必要であると思われる。

附記

本研究は、第1筆者の富山市派遣平成21年度富山大学人間発達科学部内地留学研修の一部として、実施したものである。

文献

文部科学省(2007)特別支援教育の推進について(通知)。
文部科学省(2009)小学校学習指導要領解説総則編。
内閣府(2004)障害者基本法の改正について。
徳田克巳・水野智美(編著)(2005)障害理解一心のバリアフリーの理論と実践一。誠信書房。
山本亜紀子・佐藤慎二(2008)特別支援学級に在籍する児童・生徒の交流及び共同学習に関する調査一特別支援学級担任と通常学級担任を対象として一。植草学園大学紀要, 9, 63-75。

交流及び共同学習に関するアイディアアンケート
特別支援学級担任・今までに交流級の担任をされた方

各学校・学級において交流及び共同学習（ここでは、特別支援学級の児童が交流級または交流学年の児童と一緒に生活・活動すること）を行っておられると思います。毎日、忙しい中でより充実した交流及び共同学習となるように実際に行ったことのある配慮をお書き下さい。（以下の欄に、該当する配慮をお書き下さい。該当しない欄については書かれなくて結構です。）

記入される先生について該当する欄に○をお書き下さい。
所属（ 特別支援学級担任 ・ 本年度又は過去に交流級の担任 ）

例	学習への取り組みを促すための配慮	交流級の学習に参加しやすいように、支援級で事前練習する。
---	------------------	------------------------------

本人への係や当番の割り当てに関する事	話し合いには参加できないので、朝の会の時は、健康観察板をもっていく係をしている。
--------------------	--

項目		具体的な配慮の例
直接的な配慮	担任同士の連絡・調整に関する配慮	
	学習への取り組みを促すための配慮	
	本人とのコミュニケーションを図るための配慮	
	付き添いや、学習の補助に関する配慮	
	その他	
環境での配慮	交流級での座席に関する配慮	
	交流級でのグループ構成に関する配慮	
	交流の時間帯に関する配慮	
	その他	
集団参加への配慮	保護者への啓発に関する事	
	児童の障害理解に関する事	
	本人への係や当番の割り当てに関する事	
	送迎など教室の移動に関する事	
	その他	

上に関する事以外で配慮されたことがありましたらお書き下さい。

ご協力ありがとうございました

図1 アンケート用紙

